
女神しか知らない恋の道!??

澪香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神しか知らない恋の道！？？

【Zコード】

Z5478Z

【作者名】

澪香

【あらすじ】

平凡女子の天川奏と不良男子？の柳澤零が描く恋愛+SF+ファンタジーの学園ストーリーです

第一話 小さな出会い

キンコーンカンコーン

鐘の音が学校全体に響く

「今日は転校生が来てまーす」

加藤先生は勢いよくドアを開けながら言った

先生が黒板に転校生の名前を書いている。読みでみると柳澤零やなぎざわいと書いている

「血口紹介よろつ」

「神道高校から来た柳澤零……です」

「神道高校？聞いたことがある……」

「神道高校ってあのヤバいくらい有名な？」

教室がザワザワしている

「静かに、零君は窓側の一番後ろの席ね……」

「うそ……私の隣、じゅん殺されるって

さつき思い出したが神道高校は生徒のほとんどが不良で有名だった

「おまえ名前は？」

「さきなり名前を聞かれた初対面なのにその言い方あり？」

「あ・・・天川奏あまかわかなでで・・・です」

「あつそ」

「聞いてきたのそつちだろ あつそ つて何だ

零は席に座ると授業の用意をしてる不良じゃないのか??

一時間田は数学だった

「おいつ教科書を忘れたから」と言つて手を出す

えつ私に言つたの・・・そりやあ隣の席だしね・・・怖いよお

私は不良男子（零）に向かつて田を合わせずに教科書を渡した

「ありがとう」

不良に感謝されただぞ・・・おいつてか」おいつ本当に不良か??

「零つてやつ不良なの??かなつち」

放課後になると静川結花しづかわかなが質問してきた

「知らないよ そんなの全く話してないし・・・」

「ええ～十回は話してたくさん～」

確かに十回は話したっていうか話かけられたからしかたなく・・・

「まいいや 帰りつか

朝 学校へ行くときは雨が降っていたが今は晴れていた

「ねえかなつち 神道高校つてお化けができるらしいよ

「ええ～お化けもいて不良もいるつて超ヤバいじやん

今日は私にとつては大きい出来事だったが世ひとつでは小さな出来事でしかなかつただろう・・・

第一話 女神に会っちゃった！？？

今日は晴れだつた不良男子（零）に会つてから晴れの日が続いている

てる

いつものよつて学校へ行く用意をしていた

異変に気づいたのは顔を洗つてゐときだつた

「そこの娘・・・」めいかいはどこでんかいじや、めいかい冥界でんかいか天界てんかいか？？？」

私はビックリして顔をあげると鏡には私の顔に似てゐる人がうつ
つてゐる

「だ・・・誰・・・家には私しかいないのに・・・」

私は後ろを向く・・・誰もいない ていつか冥界めいかいつて何？天界てんかいつ
て何

「わらわはアポロンアポロじゃ お主は・・・」

アポロン？冥界？天界？何それ？？？？？

「わ・・・私は天川奏・・・」

「奏？？もしやここは人間界じんげんかいか？？」

はあ？？何だこいつ人間界？人間が住んでるのはあたりまえだろ

「人間じゃなかつたらお前は何者なの……」

「わらわは女神じゃ 天界の者じゃ」

天界の女神？？アポロン？？あれ？？ギリシャ神話で似たような事を聞いたことがあるぞ

私はふと時計を見る 7時35分

「ヤバッ、学校に遅れちゃう……」

アポロンだかも気になるが今は学校へ行かないと……

キンコーンカンコーン

学校の鐘の音が聞こえる

私は急いで階段を駆けている

2年生の教室は3階なので、もう息がハアハアしている

2年B組の教室の前に来るといつたん止まって息を整えた

「遅れてしません！！」

教室中に私の声が響きわたった

教室を見ると誰もいないように見えたがよく見ると一人の男子が学校の用意をしている

「 ょお奏お前も遅れたのか」

声でわかつた不良野子の零だ

「 しかたないじゃん……こりこりあつたんだかい」

「 女神に会つたとか?..?」

え・・・何で知つてんの?..家には誰もいなかつたし・・・

「 なんでわかつ・・・そ・・・そんないとあるばあなこじやん・・・

」

「 やつばお前 嘘つけないんだな」

へ?..もッ 意味わからんじよ・・・

「 お前には女神が見えるんだろ」

?..?まだ一人しか見たことないもん!

「 まだ一人しか・・・眞みえるんじやないの?..」

また口がすべつた・・・

「 眞みえるわけじやねえよ」

「 何でやつこいつ事しつてんのよ」

ああ言つねやつた・・・

「俺は小さいときから神や女神が見えるから」

第二話 零の秘密

「小さいころから神や女神を見ている！？？」

なにを言つてるんだ・・・実際に女神とか神とか・・・まあ見ちゃつたから信じるしかないが

「どうして零は神とか女神とか見れるの？」

「俺は普通の人間じゃないから」

はあ？？？普通の人間じゃない？？？だつたらなんだつて言つんだよ

「どんなふうに普通じゃないの？？」

「まあ簡単に言つと天界で生まれたから」

天界で生まれた？ただそれだけで神や女神が見れるのか！？？

「俺は天界住人のアイリスと人間界の人間の間から生まれてきただ！！」

アイリス？？なんだそりや？？

「アイリスつて？？」

「アイリスは虹の女神だ」

虹？？そついえば零と出会つてから毎日のように晴れてい

しかも雨が降ったわけでもないのに虹が毎日のように出でている。・・

「じゃあ最近毎日のように晴れて虹が出るのか、そのせいかな
一.二.」

「まあそつだけど・・・てこゝが一時間田の体壱つてやまつていいの??」

「あつ！…忘れてた！…」

第四話 女神について！？？

「ねえねえなんで遅れたの？？？」

急いで体育着にきがえて校庭に出た私にむかって静川結花が言った

「ハアハアいろいろ・・・あつたの」

走ってきたので息があらー・・・

「いひいひつて何？？」

女神を見たなんて言つても信じないよな・・・

「寝坊したのーーー！」

さあ初めて嘘ついたよお結花・・・、ermen・・・

「そりなんだ・・・つて嘘ついてるでしょ顔にでてるーーー！」

「なんでわかつ・・・嘘なんかついてないもん・・・

「やつぱり、かなつちが嫌なら聞かない・・・」

「うう・・・」

「いいよ、かなつちが嫌なら聞かない・・・」

涙目になつた私にむかつて結花は優しい笑みをむけて言った

「ゴメン・・・」

「いいよ気にしないから」

結花は小学校のころから優しかった・・・私があんなことになつてもいつも見方でいてくれた・・・

それから毎休みになつた・・・

「朝の話は秘密だからなーー！」

後ろから声がした・・・零だ！！

「朝つてあの女神の話??」

「それいがいなんかあつたか??」

そんな事いわれても・・・

「放課後にその話の続きを話したいから残れよ

えつれつきので終わりじゃないのあー

「う・・・うん、わかった」

放課後・・・

「よし誰もいないな・・・」

零は教室に一人しかいないのを確かめて言った

「なんでそんなに警戒してるの??」

「冥界のやつが見てたり聞いてたらヤバいから・・・」

「冥界・・・そりこえれば冥界についてはなんも聞いてないな・・・

「よし!・・・じゃあ神と女神についての話からするか・・・

「うん・・・」

「まず、神と女神は愛の力が源なんだよ・・・」

「愛の力!??

「なんで私には女神が見えたの??」

「おまえに好きな人でもできたからじゃないのか??」

「好きな人・・・零・・・ちがうちがう

ピンポンパンポンみんな帰りましょう

「あつ明日ね・・・」

はあなんでこんなタイミングに・・・

第五話 奏の秘密？？？

やばい、やばい、やばい何でこんなタイミングであんな事を思い出したの・・・

私は廊下を走つていると結花がすれ違つた・・・

「かなつちっく・どうしたの？？？」

・・・結花「メンもう終わつたことなのに出で出すと涙が止まらないんだよ・・・

「結花・・・こないで・・・」

私の声は廊下に響きわたつた・・・

学校を出るとさつさまで教室にいた零がいた

「じつしたんだ？さつさまで泣いてなかつたの？」

「か・・・関係ないでしょーーー！」

「幼稚園のときのか？」

「んでもーーー」つがその事をしつてるのーーー？

「そ・・・そりだよ・・・」

もつかたないな・・・

「ちよつと昔の事を思い出して泣いてただけだから・・・そ、じ、い、てよー。」

「ヤダね・・・」

「な・・・どくのもできないの！！」

まだ話は終わっていない・・・・

そ・・・そんな理由で・・・

— その幼稚園のときの事と関係があるんだよ!!!!!! 「

「あ？ 何言ってるの？」

私は泣きたからも話す
・・・

いしめられてたんたる!! 紅茶にてやはははは

あのときも今も結花は変わらずでなしへ

私は泣くのを我慢しながらも声はふるえていた

「あいつのなかには悪魔・・・お前のなかには女神がいるんだよ・・

•
L

第六話 あらたな不思議??

零にあんな事を言われたが嘘だと思い零をおして走り帰った

家 5時15分

「う・・・うう・・・」

私はあの事（こじめられてた事）を思い出すと自分が止められない

ピンポーン

今日は畠守のふりをしようと思つたが何回もなつてひるたこので
しかたなく出る」とした

ピンポーン ピンポーン ピンポーン・・・

私はドアを開けたそこには結花が立つてた

「なんかあつたの??かなつち??男子になんか言われた??」

結花は私のことを見ながら言った

「『メンちょっとね・・・』

私は作り笑顔で二口と笑つた

「そ・・・そう・・・」

結花は最後こうつて帰った

しづらしくあるとめた・・・

ピンポン・・・

さすがにもう泣きおわったので出た

「よつ、さつき結花きただる」

零だった、こうつは不良男子と言われ友達があんまりいないやつだ

「わうだねビビ何？？」

「こやあチャイム鳴らしつとしたら結花がきてさあ・・・・・

「あひへ・ビビしたの・・・・」

「・・・・・ちよつと待て・・・・・

零はやつこつて勝手に家にあがつた

「ちよ・・・・・何勝手にあがつてんのよ

「こや、この家に魔法陣を使つたあとがかかるから・・・

ちつこつと零は何か呪文のように何かを言つてゐる

「

「なんてこつてるの？？」

「うつ言つたが零は無視する

「・・・」

怒りようがない逆に言えば啞然していた零の周りには赤い何かがボツと出でている・・・

「結界か・・・」

「結界って何？？あのアニメとかであるシールドみたいなの？？」

「」の家や、奏が普段つかつてゐる物すべてに結界がはつてある・・・

「

何を言つてゐるの・・・誰がはつたってこいつの？？？

「だ・・・誰がはつたの？？」

私はよくわからないがなんとなく質問してみた

「わからない・・・でもかなり強い魔術だ何年ももたない術なのに10年はもつてる・・・」

「魔術！？？10年？？さっぱりわからない

「奏の家族の写真つてあるか？？」

「え・・・あ・・・うん、あるよ」

お母さんはだいぶまえに死んでお父さんは仕事で大変だった

「これでいい？？だいぶ前の写真だ」

零にそれを見せると零はびっくりしているようだ

「どうしたの？？」

「こ・・・これは力オス殿！？？」

「力オスつて誰？？お母さんは天川未来あまがわみくだよ」

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

第七話 裏切つと眞実

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ……」

私は零が言つてゐる意味がよく分からなかつた

「よく分かんない……くわしく説明して……」

「うへんくわしくつて奏のお母さん『カオス』がセカイの始まりつてことかな……」

お母さんがセカイの始まり??

「まあそのうち分かるから……そうだ鏡……鏡」

「なんで鏡さがしてるの?」

「あつあつたこの鏡に奏の顔をつつして……」

「またお主か……まあとりついてしまつたからしかたがあるまい」

鏡にうつつた私が言つて「つか顔とかちょっとちがう

「零……もしかして私にいる女神つて……」

「そう……この方はアポロンつて言つて音楽・予言・弓矢・牧畜の神だ」

疲れて幻を見ていると思っていたこいつが女神だったとは……

「でもなんで私なんかに・・・」

「こりねーよ そんなの遺伝子的じゃないか?」

「お主らアーヴィングのとくまぬがここから逃げたまづがいいのでは
? ?」

「? ? 何を言つてゐんだ? ? ?

「こべぞ奏・・・」

ナツコは零は私の手をグッと握りつて、外へ出て学校のまづく
走る

「零どうしたの? ? ? なんでアポロンが言つた」とで逃げてるの嘘か
もしけなこじやん」

零の手が温かい・・・

「嘘じやないかもしけないアポロンは云々の神でもあるのだから・

・・・

「それは分かつたから手 はなしてよ・・・」

私は顔を真つ赤にしながらあわてて言つた

「俺の足の速さにこじられるなこじかどな

やうこじと零は手をはなす私は走るのをやめやうになつたけど頑

張つて走る

「学校だつたら大丈夫だろ」

そういうと見覚えがない学校??のなかに入つていつた

「ま・・・待つてよ」

私は全力で走る零は階段をかけあがり3-Aの教室に入つていつた

「な・・・なんでこんなところに逃げたの・・・」

「なんでつて・・・」

零は言葉を中途半端にしながら真剣な目になつた

「ミッケタ」

かすかに聞こえたロボットかのような感情のない声

「ででこ」よ 悪魔

零が教室中いや学校全体に響くくらいの声で言つた

「悪魔つて・・・」

「冥界のいや・・・地獄の住人じや」

私が片手に持っていた鏡にうつるアポロンが言つ

「敵2人・・・女・・・女神いりと神と人間まざりの男・・・」

今度は女の声がした・・・聞いたことがある声

「敵は1人か・・・」

零が言った

「なんで・・・敵は2人じやないの??」

「いや、敵は1人じや悪魔は人間にとりつく」

「そう・・・もし悪魔が2人だつたら悪魔がもう復活している事になる」

私の質問にアポロンと零が答えてくれた

「メガミ・・・カミ・・・コロス」

どこからか聞こえてくる声・・・

「ユカ・・・トモダチヲコロスケドイイカ」

「ええいいわよはつきり言えば偽友だから・・・」

暗闇からゆっくりと出でてくる1人の女

「ゆ・・・結花!??」

「ああ奏か……『メン前から嫌いだつたんだ』

結花は満面の笑顔で言つた

「う・・・・嘘だよね・・・・・」

「嘘じやねえよ」

零が大きな声で言つた

う・・・・嘘だよ・・・・ね

私の目には涙が・・・

「や、き俺がお前の家いつたときに結花が舌打ちしてたしな……」

零が私を説得するよ」と、

そ
・
・
・
そ
ん
な

「さつさとこんな人生を終わらせたいならこっちに来てすぐらくにしてあげるから」

結花はさつきから満面の笑顔だ・・・

「じゃ・・・じゃあ幼稚園のときの気持ちは嘘だつたの??」

「 ましょ 」
 そう何年我慢してたと思つてんの??.まあいいわれりをとばじゆ

「はじめるつてなにを・・・」

私はもう泣いてなかつただつて零やアポロンがそばにいてくれた
から

「戦争を・・・戦争を始めましょ」

結花は不気味な笑い声とともに言つて暗闇に消えていった

「奏・・・今からは戦いがはじまる・・・アポロンは全く力が戻つて
ない・・・今から落としていいか」

零は真剣な顔で言つた

「落とすつて何を」

「とべかく皿をつぶつて・・・」

私が皿をつぶると私の唇にほやわらかになにかがあたつてこむ

びつくりして皿を開けると零の唇だった

「なんじゅ無理くじゅのう零たしかに奏の好きな者はお主じゅが・
・・」

「いいじゃないですか俺もあいつの」と好きなんだから

「まあいい話はあとじゅう」

アポロン
私の頭には天使の輪のようなものがあった

「おおこんなキス一回でこんなに力が戻るとはお主は天才じゃなあ」

「うぬわこな……ゼスと呼ベゼスと……」

「ほうお主はゼウス殿の子ではないか……？」

「もうだ……」

「あら神々ビーヴーのお話中ですみませんがもうはじめていいかしら
？」

「ああ臨むといひだ……」

第八話 大人な遊びしませんか？？

アポロンへ

今わらわは学校とやらにゐる・・・」」は戦場じや

「女神と神もどき・・・ふふ・・・すぐ樂にしてあげますわ」

あの結花とやらは不気味な笑顔で不気味な笑い声をたてながら言った

「」」はダメじや・・・校庭まで逃げないと死ぬぞ」

わらわの予言では学校全部破壊すると出た

「わらわは東門からゼスは西門から・・・」

わらわとゼスは同時に走り出しふたてに分かれた

「クッやはり」ちらにも敵の手が・・・」

わらわの東校舎のほうにはトゲのトラップが多く仕込んであつた

「ふふ・・・校舎から出るまえには殺せそつ ふ・・フハハハハハ
ハハハハハハハ」

どこのからか聞こえてくる悪魔の声は不気味さを増している

「わらわはこんな簡単なトラップでは死ないぞ・・・」

わらわの声も学校中に響きわたり

「おう……」んなとこりで死ねつか

ゼスからの返事が聞こえた

「そろそろウオーミングアップは終了じゃこつも通つてこいつではないかお主もそうではないかゼス」

わらわは術を使って『矢を出しへリアップを一つ一つ確実に射る

「やうだな・・・負けてらんねえー」

ゼスのまづからは魔法陣のヒカリが見えた

「クッやはり本氣で叩かないと死にそうにもなんなんわ・・・おいつあれで一発で殺せ」

「フハハハハハ オヌシモホンキテイクノジャナ」

小さい声だつたけどかすかに聞こえたたぶん屋上あたりにいる・・

「出口じや・・・」

大きな魔術の氣配を感じた・・・わらわはゆづくつ外へ出た

「ヤアヒサシブリダナ アポロンオヌシハマツタクカワツテナイ」

わらわの首にはナイフ・・・目の前には人間の姿だが声的に悪魔
だろう私があつたことある悪魔

「クミか・・・」

クミとはずっと昔わらわの力が完全だつたときに戦つた悪魔

「フハハハハアノトキオヌシニマケテカラワラハカワツタゾ[マジ
ユツモツヨクナツタシナ」

よく考えるとクミも完全に復活してないよう思える

「じゃあ殺してみたら一inggaンを」

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

不気味な笑い声をたてながらクミはナイフを首めがけて動かした

「ダメ人を殺しちゃ・・・絶対ダメ」

そのとき1人の女の声が聞こえた・・・そう悪魔は悪魔でもこの
人間とつながってるそして感情も・・・

「ナ・・・ジヤマヲスルナルナ・・・ウガアウワアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

激しい叫び声・・・

「す・・・すみませんゴメンなさい」

「お主は謝るな・・・つらい思いをしてきたんだろ・・・」

「うううてわらわは瑠奈と言つた女をだいた女の目からは涙・・・

「ありがとうございます・・・ありがとうございます」

「それから女はどこかへ帰つていった

奏(

「なんであるときあの子がつらい思いをしてきたのが分かったの?」

?

私は鏡にうつった私に聞いたアポロン

「あのな女神や神は愛の力で復活するが悪魔は不幸の力で復活するのじゃ!」

「不幸の力・・・それなら分かるか・・・

零(ゼス)

俺は痛みを我慢しながら魔法陣を書いていた

「ハアハアハアハアハア」

俺の腕や膝・・・いろんなところから血が大量に出ている・・・

「フフ所詮人間ねこつちは殺せそづ

廊下に不気味な声が響きまるで洗脳状態だ

「で・・・できた」

俺が書いていた魔法陣はテレポートができる魔法陣だった

「時空の神よ 俺をG市N学校の校庭へ・・・」

魔法陣がヒカリだし気がつくと校庭にきていた・・・そこには女が1人たつていた

「どうしたの？？大丈夫？？」

血は止まらずダラダラと流れている・・・

「さつそく悪魔入り女か・・・」

「ヨクワカツタナ・・・マアツチトチガツテカンタンニコロセソウダナ」

あつちはうまくいったのか・・・

「魔法陣種第24番機・・・抹殺の玉・・・悪魔・・・死ね」

俺の目の前にはグロテスクな光景が広がっている

「まあ女さえ殺さなければいいのだからこなんんでいいだろ」

奏へ

「零？？大丈夫？？？」

私が校庭に行くと血のたまりがあつた零に聞くと

「俺の血だ」

「ちっやられたか・・・わたくしが手をくだすのはもう少し先にしましょう」

「そりなんだ・・・」

私は結花のことがあり学校に行きたくなかったが零もいるので行つてみた

次の日・・・

キンコーンカンコーン

加藤先生がドアから入つてくる・・・最初に口にした言葉それは

「結花さんは転校しました」

教室がざわめきで包まれた あとで先生に聞いてみた
「ど」「へ転校したのですか?」

先生は困ったようにして行った

「それがわかんないんだよね・・・家は売り出されて、今考えると
家族の顔見たことないのよね・・・」

「そうですか・・・」

私がそういうと先生は何か思い出した口調で言つた

「やついえば下駄箱にね入つてたの・・・」

「何が入つてたんですか? ? ? ? ?」

「カラスの羽よ・・・しかも何枚もよーーー!」

カラスの羽・・・もしあの出来事のあとに学校に来たのなら・・・

そのときだった・・・放送のチャイム

「ピンポンパンポーン」この学校は私達が支配したーーー!」

第九話 あらたな敵！？

「ピンポンパンポン」の学校は私達が支配した……

学校中はザワザワと荒れている・・・

「どうせ演劇部が放送部の練習だろー。」

などと放送が嘘だと言つてる人がほとんどだった そのときだつた教室のドアが開いた

「始めてー 黒い鳥の黒羽でーす ここに女神と神もどきつてい
るう？？」

ブラックバード・・・ 黒い鳥・・・ カラス・・・ 結花！――！

「あつれーゆかりんの情報だと『なんだけどなー出てこよクラ
スの全員を殺してもいいんだぜ』

黒羽こうやつはたぶんだが結花と同じグループの者なのだらう・・・

「はあ？ そんなやついるはずねえだろーー！」

クラスの男子はこうつてている

「危機感がないやつらね・・・」

そういうと黒羽は男子一人を捕まえ首に手を近づける男子は零だ

つた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦・・・」

「ほそりと零がつぶやいた黒羽の周りを囲むように魔法陣が作られていいく・・・

「フハツ自分から出でくるとは光榮だね・・・魔術種第21番機・・・狂歎車・・・」

黒羽がそう言つた瞬間・・・魔法陣がパズルが狂つたかのように崩れていつた

「チツ・・・」

零は舌打ちをして黒羽から離れた

「アポロン・・・お前もほうが力あるだろ」

零はそう行つて私からアポロンに変われと合図する

アポロン

「なんじゃゼスわらわに協力せよと・・・まあ良いが」の服は動きづらいぞ

わらわはジー・パンとならを描きしながら言つた

「 しらねーよ ちょっとこいつらを倒せばいいだけなんだから 」

「 しかたない天界術式第44番・・・罪と正義の分かれ目・・・ 」

わらわの手には天術のかたまりでできた刀で黒羽にたちむかつた

「 魔法陣種第25番機・・・神の鉄槌・・・ 」

ゼスはギロチンの刃でできた刀でたちむかつ

「 ふふつ やつと2人でましたわね・・・死になさい 」

黒羽がそう言つた瞬間に教室からはツルのよつなものが出てきた

「 なつクラスのみんなを殺す気か！ ！」

零はクラスのみんながいるのに気づいていた

「 フハハハハハ 」 いつも道具として使わせてもらつ

そういうヒツルのようなものは止めがけて動いてくる

「 キヤー—————— 」

ツルは皆の体の中心をつらぬいていた皆の体からは大量の血が・・

「やハヤホト」な悲しき懸念するは私で十分」

私はアポロンから自分の意識を奪い取り必死に叫んだ

「フフ言つたわね
じやあ遠慮なく」

そう詰うとツルのすべてが私の体めがけて動く

「奏！！！」

零たゞた零は刀を使ひツルを確實に切つていぐ

スコロス」

クラスの皆が私のところに近づいてくる

「やめてやめてやめてやめて嫌嫌嫌嫌もう昔みたいに1人はヤダヤダヤダ」

アポロン

「お主の・・・友達をこんな目にあわせようと・・・ただですむと思つな・・・天界術式第1番・・・幸運と不運の境・・・」

クラスの者はみなバタバタと倒れていく・・・別に殺したわけでない眠らしたのだ

「チツやはり人間は使えない・・・この学校ごと死で埋めてやる」

ツルはどこかへ引つ込み黒羽はどこかへ行った

「ソニーは離れよう・・・」

体力を大幅に消費したわらわには今予知は使えない・・・

「だが学校の人々が・・・」

ゼスはそう言って反対意見を出した

「何を言つておる・・・もし神と女神がそれなりに力を取り戻せれば簡単の事ではないか」

わらわはこう言い残し奏へ変わつた

奏へ

「え・・・あ・・・」

私はいきなりアポロンに言われたのでどうすればいいのかとまどつていた

「あ・・・あのさ前から好きだった・・・」

「え・・・い・・・今・・・」

「お前のことが好きなんだよーー」

私は顔が赤くなつた・・・好きな人に告白されたのは初めてだ・・・

「あのおー良いムードのところすみませんが私・・・協力しますよ・・・」

そこには腰のあたりまで伸びてる茶色の髪の毛でいかにもモテそ
うな女の子がたつていた

「わ・・・私・・・水谷葵つて言います・・・あの・・・その女神
が入つてます・・・」

「め・・・女神入り!-!-」

私と零は声をあわせて言つた・・・この学校にまだ女神入りがい
るとは思つていなかつた

「まあメンバーが1人増えたしさつさとみんな外に・・・」

「はい!-!-」

零が言い終わるまえに葵さんは返事をした・・・なんか不思議な
子・・・

「(+)に女神と神の力あり・・・この人々の愛でみなを助けたまえ・
・・・」

そういうて目を開けると私達は校庭にいた もちろんクラスの皆
もだ

ドッカーン

それは校庭に出ですぐのことだつた激しい爆発音がし学校が崩壊していく

次の日

学校から電話があつた学校は新しく建て学校ができるまで休みだ
といつ

「しばらく零と会えないのか・・・」

さりに零の皆田のせいがアポロンには翼がはえた

プルルルル

ケータイの呼び出し音がなつた だれだろつ

「誰で・・・」

「た・・・助けて」

その声は葵さん以外誰の声でもなかつた

第十話 奏が・・・

「た・・・助けて」

「な・・・どうしたの・・・」

「M地区の旧校舎で・・・」

そこで電話は切れた私は夜で雪が降ってるのを無視してM地区の旧校舎にむかった

「葵さん・・・いますか? ?」

旧校舎は昔、神道高校だつたらしいとても暗く怖いしかも迷路のようつこ道がたくさんあつた

「きや――――」

葵さんの叫び声が聞こえた私は迷路のよつな廊下を走り一つの教室のまえで止まる

「オカルト研究部・・・」

私はゆつくり教室のドアを開けた・・・だがそこには人間の影なんてどこにもなかつた

「葵さん?」

私はゆつくり教室に入った

「遊びませんか？」

後ろから声がした振り返ってみるとそこには骸骨がたつてた

「椅子取りゲーム・・・やらない？？」

すぐ怖かつた・・・

「は・・・はい」

私は思わずイエスといってしまった

「ルールはこうだ勝つた人の言つことをなんでも聞く・・・

勝つた人の言つことをなんでも・・・

「そりなんでも・・・な・ん・で・も」

骸骨は私の思つてることを完璧にあてた

「わかつた・・・やる」

地獄かのような椅子取りゲームがはじまつた・・・たくさんの人形達を相手にやるのだから

「ククク」

不気味な笑い声をたてながら骸骨が勝つてしまった

「じゃあ命令するよボクの仲間になれーー！」

「骸骨の仲間・・・」

考えただけでゾッとした

「ちがうちがうボクはブラックバードだよ

「ブ・・・ブラックバード・・・」

「そりアラックバード・・・フフフ君が賭けにのつたんだ

「嫌だ嫌だ仲間を裏切りたくない

「約束を破るのかい・・・じゃあこいつを捕まえろーー！」

骸骨がそう言つと私の周りを人形が囲んだ

「われわれは天界を壊すことではない・・・新世界をつくるのだよ
新世界をーー！」

骸骨のその言葉を最後に私は氣を失つた

「ハハハはどー・・・

「おつお田覚めかい？」

周りを見るとお城のよつにきれいな部屋だ・・・王の席のよつなどには骸骨が座つてる

「うううははは……だ」

「フフよくぞ聞いてくれた！」今はブラックバードの秘密基地だ……」

「秘密基地なのにこんなにでつかいつて……」

「秘密基地だよ……だつて本部のほうがでつかいんだから」

・・・今思つたんだが動けない・・・足も手にも何もされてない
のに・・・

「ああそれは魔術だよ」

「ま・・・魔術」

「あ・・・葵さんは」

「あああれは偽者・・・すごいだろ魔術といつのは」

骸骨は不気味な笑い声をたてながら言つた

「お前はこの組織のなんなの・・・」

私は質問をしてみた

「フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ
フフそのうち分かるぞ」

ちょっと不気味だつたいつもよりも・・・

「おいこいつを洗脳室へ連れてけ」

骸骨は私を指さしていった

第十一話 奏の危機

「おこにこつを洗脳室へ連れてけ」

骸骨は私を指さしていつた

アホロン・・・

和が読んで毛向毛反應がない

あああの女神がお前かひ出させてどうかい」たそ

骸骨が答えた。私は今一人。

そこは鎌がたくさん置いてある不思議な部屋だった

「やめやめやめやめ」

零

俺は奏に電話を50回以上かけてるが全部留守と言つ

「なにしてんだ奏・・・」

俺が電話を壊しそうになつたとき窓が鳴つた

ドンドン

窓を開けると巫女のような人がうついていた

「ゼス……奏が……」

「アポロンか……」

俺はアポロンから奏の状況を聞いた

「奏がブラックバードに……嘘だろ……なんで奏を守んなかった」

「あそこに入るのは私には無理……全面的に魔術で入つたら私はもつこにまいない……」

「まあいいとにかくそこにつれてけ……」

俺はそつこつてコートを着て外へ出た

「どうちだよ

「あつち……G公園のところ

「よし行くぞ……」

第十一話 洗脳少女VS不良男子

零

俺がブラックバードの秘密基地？につくとそこには人間の影が
「きたか・・・フフ・・・・」

ブツブツと不気味に何か言つてゐる女性だった

「奏はどうだ！？」

「奏？あああの子・・・フフ大事な人を助けに来たつてわけ・・・
でももう遅いよ」

女は不気味に満面の笑みをうかべながら言つた

「ここを通してもらひ・・・魔法陣種第22番機・・・コロロの針・
・・」

「フフそれはわたくしに戦えと・・・そう考えていいのか？」

「ああ・・・」

女の顔からも俺の顔からも笑みが消えた

「だがわたくしに勝つたとしてもお前らはここに入れないあの子が
自分から出でこないかぎり会えないわね」

どうか魔術度がおおすぎて入れないのか・・・俺はケータイを取り出し1人の女に電話をした

「今すぐG公園に来い・・・」

「え・・・あ・・・どうしたんですか？零さん」

緊急事態だ……奏が捕まつた

その言葉と画面にエアが翻ぐ音がした。奏た。・・・

かた

卷之三

その言葉には感情がなく奏でたくない口説など思つた

「女神の微笑み」

「奏・・・チツ・・・」

俺は舌打ちをしあいつが来るまで奏を殺さず耐えるといつ決断をした

「モウナニモカモイラナイ……」

奏はボソッ と そ う い う と 僕 の そ う へ 走 つ て く る

「シネ・・・デキソコナイノカミ・・・」

「魔法陣種第14番機・・・無限の盾^{インヒヤーリッシュール}・・・」

「これでしばらくは耐えられるだろ？・・・俺の周りには盾がはら
れそこに奏が突っ込んできた

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス

「クッ」

「強い・・・盾でガードしているがそれでも痛みが伝わってくる・・
・あの短時間にどんな事が・・・

「プシュケーサマノケイカクヨジャマサセナイ」

「プシュケー？計画？？いろいろ分からぬことばかりだ・・・そ
んな事を考へてる間にも無限の盾も崩壊しあじめた

「そろそろ壊れるか・・・」

「そう心でも思つたときには・・・

「あの遅れですみません！-！」

「そう俺が読んだ人物とは葵だった

「神術式第28番機・・・月旅行^{ムーントリップ}・・・」

葵のその言葉と同時に満月の光が秘密基地や俺らを照らした

「月の世界へ・・・」

その言葉と同時に奏が倒れた

「大丈夫か？奏」

「大丈夫ですよ気を失わせただけですから」

葵は優しい笑顔で言った

「魔法陣種第5番機 時空の歪み・・・」

この術は結花と戦つたときに使つたものだ

「時空の女神よ 僕らを俺の家へ・・・」

俺と葵そして奏を魔法陣が包みしばらくすると俺の部屋に

「ハナセココハドコダ」

奏が起きたのでやばい行動をされないように柱に鎖で縛りつけと
いた

奏（

目が覚めると誰かの部屋にいた・・・1人の男が視界に入るブシ
ュケー様の邪魔をする男だ

「ハナセ」「ハド」「ダ」

そういうばなんでプシュケー様の命令に従つてゐるのだろう・・・まるで束縛人形だな・・・この男はどこかなつかしい感じがする・・・一緒にいると落ち着く・・・それでも私は縛られているあの人のせいだ・・・まるで鎖で縛られ何もかも決められ命令どりに生きていくのだろうか・・・そんなのヤダでも逆らう勇気がない逆らつたら昔みたいに・・・昔?昔何があつたつけ・・・そういうば昔の記憶がない・・・

そんなことを考えながらも私は暴れていた・・・もう何もかもわからぬ

氣づくと私は柱に鎖で縛られ動けなかつた

ついせつきまで戦つていたはずの男は私にむけて優しく微笑んでいる・・・なんなんだこの男は・・・誰なんだ・・・思い出せない・・・思い出したい・・・こんな事ホントはヤダ・・・向けだしたい・・・こんな暗い差別ばかりの世界を・・・そうだプシュケーはそう私に言つたんだ・・・結局ただ道具としてしか使われてない・・・どうせだったら・・・もう・・・もう・・・

「奏・・・俺を覚えてるか?」

いきなり男が話しかけてきた

「知るか・・・」

何か私の言葉には感情という何かを生み出すことができた気がした

「そうか・・・俺は零・・・柳澤零だ・・・」

「零・・・なんかなつかしい・・・」

どこか聞いたことがある・・・私にとつて何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切な大事・・・な人・・・

第十二話 復活

どこか聞いたことがある……私にとつて何か大切な……大切な人どうしてかはわからない……でもとにかく大切な人……

「チツそろそろ記憶が戻るか……」

どこからか聞こえる小さな声……聞き覚えがあるが分からぬ思い出したくないそんな気がした

ドッカ——ーン

外から大きな音がした零という少年が窓から音のするほうを見る
と舌打ちをした

「こんなときに来るんじゃねえよ」

誰がきたのだろう……分からないがけっこつやつかいな人なの
だろう

「奏……一緒に戦つてくれるか?」

ぼそりと零が言った……戦つてさつきまで敵のように……
でもなんか敵つて感じじゃなかつた……信じていいのかな……

「裏切らない?……信じていい?……」

私は零なら何か信じてもいいと思つた裏切らないって思つた……

「俺はお前を信じる・・・決めるのはお前だ・・・」

私の目からは自然と涙が・・・涙が流れながらも私はコクシソとうなずいた

「信じる・・・まだ何も思い出せないけど・・・でも・・・」

私は泣きすぎてこれ以上何も言えなかつた零はそんな私を見ながら鎖をほどいて私を解放してくれた

「お前はお前らじいればいいんだよ・・・俺がお前を助けるから・・・」

零は私を抱きしづつ言つてくれた

「行こ・・・」

そういうと私の手をつかみ外へ出た

「出てこいや・・・こりんだら結花!-!-」

結花・・・結花・・・何かとても嫌な思い出が混ざつて思い出やうと思つたが思い出せなかつた

「あれえもうばれた?まあいつか

暗闇から1人の少女が現れた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦」

結花をかこむように魔法陣が作られていく

「フフ・・・フハハハハハハこんなレベルの低い技でブラックバードに勝てると思つての」

不気味な笑い声・・・嫌!思い出したくない・・・そんな事を思
いながらも昔の出来事や結花の裏切り行為が頭のなかにインプット
されていく

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア」

そのまま私は意識を失つた

零(

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアア」

奏はそのまま意識がなくなり・・・天界術の暴走が起こったアポ
ロンが奏のなかに入ろうとしたときに起こったアクシデントだ

「奏!—魔法陣種第76番機・・・宝物の探し旅・・・俺の大切な
ものは・・・」

奏!お前だ・・・

「フフなんかいい調子魔術式第29番機・・・悪ノ目」

結花の悪ノ目とは前に聞いたことがある・・・人の思い出したくない辛い過去を思い出させる技だ

「結花・・・やめろ！・・・」

結花は奏のほうを見て不気味な笑顔を作っている

「フハハハハハハハハハハいい景色」

俺は結花の視覚に入り自分が技の対象になつた

「チツ邪魔だ」

ぼそりと言われたがそんなのは無視した思い出す辛い過去・・・信じてた人に裏切られた辛い記憶・・・でも奏に比べればそう思った

「魔法陣種第22番機・・・口口口の針」

俺が今いやなのは奏を失うこと・・・奏を助けるには・・・

「針よ・・・結花・・・静川結花を倒してください」

針は結花のほうにむかつていく結花は針の速さに追いつかず体にささる

「フハハハお前は人を殺した・・・人を・・・それはお前にとつて忘れられないことだ！！」

結花はそんなことを言ったが実際は幻覚だ人を殺してなどいない

幻覚の中で殺したのだから……だが現実では結花は気を失つただけである

「奏……」

奏のほうを見ると奏の目からは涙が……そう宝物の探し旅は大切な人を助けたいという願いが2分の1の可能性でおこるものである

「れ……零? ?」「ゴメンね……ずっと忘れてて……」

「奏……」

俺は奏を抱っこし家のなかへ入つていった

奏へ

目が覚めると零に抱っこされていた

「奏……ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

第十四話 葵が！？

「奏・・・ありがと！」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのどちらかと不思議だった

再び私は眠り起きると零の部屋の零のベットにいた

「あれえ？ なんでここにいるんだ？」

私はベットから降りようとしたら何かにあたった・・・電気をつけてみると零だった・・・

なんで一緒に寝てるんだ？」まあいや私は再びベットに戻り寝た

次の日

私が起きると零はベットにいなかつた零の部屋は一階で一階からは良い匂いがした

「ふああああ

私はあぐいをしながら一階へ行った零はキッチンで料理を作っていた

「おはよう・・・昨日はありがとうございました」

私は昨日の記憶がないでも零に助けられたところは分かる

「ああおはよう」

零はフライパンで目玉焼きを作りながらいった

私は居間の椅子に座り零の家がこんな感じなんだと思いながら壁紙を見たりしていた

昨日どんなことがあつたのだろう・・・そんな疑問がある・・・でもそんな大切な事でもない

「どういたでしょ」

零はちゅうと黙もつと声で言った

「はーーー」

私はダイニングルームに移動し零の手料理に睡然した。「飯・目玉焼き・サラダと水・・・」じんだけバランスのよい食事をしているのだろう

「いただきまーす」

零と私は声を合わせ言い食べ始めた・・・零はこんなに料理つまかつたんだ・・・そんなことを思った

「うわそつをまでした」

私は皿を片付けお礼としてお皿洗いをした

「零つて1人暮らしなの？？」

「ああ・・・お母さんは女神だから天界にいるし、お父さんは病気で死んだ」

「なんかゴメン・・・」

そつか零は人間と天界の住人の間から生まれたんだもんね・・・

「いや謝んなくとも・・・」

「えつあつゴメン」

つい謝ってしまった

「だから謝んなくともいいから・・・」

零

ピンポーン

家のチャイムが鳴った

「？誰だ？？」

俺は不思議そうな顔をしながら出た

「あのえつと葵ですが秦さん元気ですか？」

葵か・・・

「ああ葵か・・・秦なら元気だよ」

俺はそういうながら秦を連れてきた

「よかつた・・・」

葵はなんか変な反応をしている・・・

「大丈夫か？顔を赤くして？」

俺は葵のおでこに手をあて熱がないのを確認した

「熱はないな」

ただそう言つただけなのだが葵は顔を真つ赤にして「ひらを見られ秦はムスッとした表情を見せた

「俺なんかしたか？」

「した」

奏と葵は声を合わせ言い、奏の声は怒つた感じで葵の声はあわあわしている声だった・・・

しばらく静かになり葵が口を開いた

「零さん・・・あの明日・・・学校で言いたいことがあるので・・・

L

葵はそう言い残し帰つて行つた

奏? なんてそんなにムスッとしてるんだ?』

俺が聞くと

- 恋愛事情！！

どういう意味だ？さつぱり分からなかつた・・・別に葵のことはどうも思つてないぞ？

次の日

キンゴーンカンゴーン

奏と葵の言葉を不思議に思いながらも授業をつけていた

朝、学校に登校してから下駄箱に入っていた葵からの手紙「放課後、学校裏の迷いの森の入り口に来てください」と書いてあつたのを確認した

放課後

俺は迷いの森の入り口に行くと葵がいた

「待つたか？」

「え・・・、うん全然・・・」

葵はちよつと慌て氣味だった

「あのえつとちよつと散歩しない?」

葵はそう言って俺の手をつかんだが、なぜか顔を赤くし手をはなした

奏へ

私は葵がきつと零になにかするだらつと疑い零や葵に氣づかれないよつてひつそりついてきた

「迷いの森の入り口?」

葵のあとをついていくとついた場所だ

零がきた・・・なんか話してる・・・あつ手をつないだ!—あつはなした・・・

葵へ

「どうしよう・・・2人つきりにしたけど・・・もつと緊張してき
た・・・よし!—!」

「零ちゃん……あの……私、零ちゃんの事が好きです……」

あわわわわあ うやひひゅうたよお おおおおおお

「うううと何やうううのよー。」

私はびっくりして声のするまつを向こうた秦さんだ

「零は……零は私の……私の……」

奏さんも慌ててゐみたいだ

「2人ともびうしたんだ?」

零ちゃんは何が何だかさっぱりわからず質問してきました

「零……私と葵……ドッヂチをとる……?」

奏さんが真剣な顔で私のほつを見る……

「わ……私も聞きたいです……」

「お……俺は……」

零

奏と言おうとしたが強い魔力を感じたので言えなかつた

「お……俺は……」

「敵だーー！」

「じゃあ戦い終わったら・・・答えてね・・・」

奏と葵はそういう女神に変わった

「フフフフフフフフ今田は楽しい遊びになつそり

上を向くと黒羽がいた

第十五話 新しい仲間は？？

「フフフフフフフフ今日は楽しい遊びになりそり」

上を向くと黒羽がいた

奏（

なんでこんなときに敵がくるの――――そんな事を考えながらも私はアポロンにかわった

アルテミス（

葵と奏殿女神の意識になり、戦いがはじまった

あと私の名前はアルテミス・・・言い忘れていた・・・

「フフフフ今回は森全体を魔術で囲んだお前達の力は弱まつた

黒羽の言葉にブチッとなりつい術が

「神術式第23番機・・・希望の鈴」

私とアポロン殿そして零殿の周りを神術の陣が囲む

これなら少しは魔術の影響をつけない

「チツ小細工しやがつて死にな」

私の周りにはトゲが多いツルが囮み逃げ場がない

葵

零殿がツルを切り私のことを助けてくれた

さすが葵の彼氏だ……だが私はアルテミスだ」

「わりいー・・・あと彼氏じゃない」

こんなときでも鈍感だな
・・・

アポロン／

ゼスも鈍感すぎにもほどがあるぞ！

一 天界術式第85番機 神の天罰

わらわの装備には矢と弓が増え黒羽にむけてうつてるのだが、よ
けられる

「逃げるな直接戦え！！」

不気味な笑い声と共に黒羽がおりてきた

まあから気になっていたのだがその趣味の悪い高そうなネックレスはなんだ？？

わらわは弓矢で黒羽をねらい射る・・・

黒羽は左手をわらわのほうへ向け

魔術法第77番 死の道しるべ死にな」

そういうとネックレスが黒い光をだす

力が・・・力がみなぎるぞ・・・フフツフアツハハハハハハ

れらは皆矢張黒く光る矢を身にあたたか

「ぐ・・・な・・・何を・・・」

そういうと黒羽は倒れネックレスはなぜか消えた

「なんなんだ・・・あのネックレスは」

それからゼスと葵を呼び、そのことを話した

奏

黒羽は零の家にとめる事になつた。ちょっと心配・・・

「ああ結局あれからなんも言つてないじゃんー..」

さつきの続きをどうなつたのだろうか？零は私のことを選んでく

それからすぐ私は寝た

次の日

「はじめまして！黒羽佳奈です」

なつ、黒羽つて言つたか性格だいぶちがう

「なんかちがう人みたい」

私は零にこうそり言った

「やつぱり奏のときみたいに『記憶がない』

私にそう返した

「あのあんまり覚えてませんがよろしくお願ひします」

どういふことだ・・・もう無関係になつたのでは??

「もう無関係じゃないの？」

「あつ言こと忘れです。えつと女神入りです！」

「こや、俺の家いのときに入つたみたい」

「あつあつえな———」

私と葵さんは声をあわせこいつた

「零・・・・くひせ・・・・じやなくて佳奈さんになんかしたでしょー。
——」

「えつ？なんいもしてないが！」

零は鈍感だからどういふことかわからぬりわかつてない

「まあとこかくひしふーーーーー。」

やうこいつと佳奈さんは零の手をつかんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478z/>

女神しか知らない恋の道!??

2011年12月29日22時49分発行